

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 宮城県 】

1 実践テーマ	【 III・V 】
2 実施対象者	宮城県利府高等学校 スポーツ科学科2年次（2クラス） 76名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名（スポーツ総合演習）</p> <p>② 行事名（ ）</p> <p>③ その他（ ）</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名（ ）</p> <p>② その他（ ）</p>
4 目標 (ねらい)	『共生社会とスポーツの可能性』というテーマのもと、特別講師の講演を通して、スポーツを楽しむために支援を必要とする人などに対しての支援の在り方を学び、すべての人々がスポーツに参画できる社会づくりへの振興発展にかかわることができる資質や能力を育む。
5 取組内容	<p>(2018.6.22 金)</p> <p>ガイドランナー（盲人マラソン伴走者）中田崇志 氏による講演</p> <p>本校スポーツ科学科では、競技力向上に関する知識・技能について学習するだけではなく、これからの社会でスポーツの振興・発展に寄与していくために、障がい者スポーツに関する学習・体験も実施している。授業としてゴールボールやフロアバレー、ブラインドサッカー等の種目を取り入れているが、今年度は本事業を利用し、特別授業としてガイドランナーについての講演を実施した。</p> <p>講師の中田崇志氏は、パラリンピック・アテネ大会で高橋勇一選手のガイドランナーとしてマラソンで金メダルを獲得している方である。講演では、ガイドランナーとなり金メダルを獲得するまでの経緯やその後の取り組みを紹介しながら、パラスポーツに必要とされる人材やサポート体制のあり方について説明された。具体的には、中田氏が実践していることとして、大会に向け、一人のアスリートとして選手と同じように身体を鍛え、試合に向けての戦略を練り、様々な準備をしていることなどを紹介してくれた。</p> <p>この講演により初めてガイドランナーという存在を知ったという生徒もあり、事前の知識にはかなり差があったが、実際の活動内容を聴くことにより、生徒全員がスポーツを支える側の必要性を改めて感じてくれたようだ。</p>

(写真1)



講演する中田崇志 氏

(写真2)



視覚障がい者とのロープについての映像

(写真3)



熱心に聞き入る生徒

(写真4)



映像を元に説明する様子

6 主な成果

中田氏の講演終了後にアンケートを行い、生徒たちに下記の質問をしたところ、結果は次のとおりであった。

Q：パラスポーツの講演を聴いて、どんな感想をもちましたか？

- (ア) 将来は何らかの形でパラスポーツに携わってみたい (6.3%)
- (イ) パラスポーツに興味をもつことができた (80.0%)
- (ウ) パラスポーツの講演を聴いたが、今後この内容を深めつもりはない (10.8%)
- (エ) その他 (3.1%)

本校では通年でパラスポーツの学習をしており、一年間の学習のまとめとして同様のアンケートを行っている。今回のアンケートはこの講演を対象としているため、直接比べることはできないが、(イ)の興味をもつことができたという回答が大多数となった。原因として、今回は講演がメインとなり、体験する場面が少なかったことから、(ア)の積極的に関わりたいという意識にまで到達しなかったのではないかと考えられる。しかし、講演の内容として中田氏がパラリンピアンを支える人材の必要性を強く訴えてくれたことが、生徒には十分伝わったと考えられる。

スポーツは、障がいの有無に関係なく、誰もが楽しめるものであるという理念に基づいた授業内容であり、今後地域の指導者となって活躍が期待される本校スポーツ科学科の生徒たちにとって、有意義な授業であったと思われる。

<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>本校では2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、「見る・する・支える」という3つの視点の中でも、「する」「支える」という点を重視している。ガイドランナーは健常者ならば誰でもできるものではなく、自分自身も競技者として参加するので、「する」と「支える」ことが一体化している。パラリンピックでは競技を「支える」人材が常に必要であることを意識させながら、自分たちも「する」側としてオリンピック・パラリンピックに参加できる可能性があるということ意識させようとした。</p> <p>スポーツ科学科の生徒は、運動部員として自分の専門種目の競技力向上を目指し部活動に励んでいる。パラスポーツに触れさせ、日頃の活動を振り返らせることにより、広い視野でスポーツを考えさせる一助となるようにした。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>運動部員が多い本校においては、スポーツ科学科に限らず、さらに多くの生徒に聴いてもらいたい講演内容であった。しかし、授業の一貫として実施していることもあり、なかなか全校行事として実施するのが難しいのが現状である。実施形態においても、講演と体験のバランスを考えていく必要がある。</p> <p>また、現在は本校に勤務している教員の人脈を利用して講師を依頼している。しかし、依頼している方の居住地が遠方のときにはあきらめざるを得ない。講師を招いての実施となると、常に予算の確保が課題といえる。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>本校スポーツ科学科では、社会でスポーツの振興・発展に寄与していく人材の育成を目的に、どのような障がい者スポーツを取り扱うかなどを常に検討している。予算が確保できれば、次年度も実施していきたい。その際、講義や講話だけではなく、実際に体験できるかという点も重視していきたい。</p>